

スタークリッパー東南アジアクルーズ乗船記
(セイラーが一度は乗ってみたい帆船)
第3回(最終回) 写真・文 吉田 瑞樹

8. 項目別に

ホテル・マネージャー、アニータさんへのインタビュー概要～リピート乗船率 60%の背景



ホテルマネージャーのアニータさんと筆者

- ・リピーター率は 60 パーセント。このリピート率はクルーズ産業では異例な高さ。スタークリッパーはリピート乗船率で業界のリーダー。乗客にはセイラーが多い。
- ・乗客は、スタークリッパー社の“フィロソフィーと船内の雰囲気”に共感している。
- ・大型船が入れない小さい島々や場所に行くことが出来る。
- ・船内の雰囲気が家族的で寛いだ雰囲気
- ・スタークリッパー社がやろうとしているのは乗客をスタークリッパーの家族に招き入れること。
- ・5年連続で”ブルーシップ”表彰(=環境対応やクリーニングの負荷軽減など)。バーベキューでは(使い捨てる)プラスチックのナイフ類使用をやめ、金属製にした。現在、生分解プラスチック製のカップやストロー納入を待っている。
- ・大型船は“海上の街”になってしまい、船上に居るといった感覚が無くなった。大海原とつ

ながっている感覚が無くなった。スタークリッパーでは“船上に居る”という感覚があり、海との距離が近い。海を感じる事が、何にも勝る“エンターテインメント”。この船で最も重要なのは、“セイルと大海原”

- ・訪問先の多くが静かな貴方だけのビーチ。
- ・本船では、(悪天候時など)短時間でコース変更が可能
- ・クルーズを検討する際には、或いは目的地を設定する場合には、少なくとも 14 か所の訪問できる島が必要。つまり 14 の異なる目的地。その理由は、一つのクルーズだけでなく、バック・トゥ・バッククルーズ¹も提案するため。
- ・標準クルーズ日数は 7 日間

Small and tall

スタークリッパーは Small ship だが、Tall ship である。マストが“高い”。“小さい”ので、狭く、



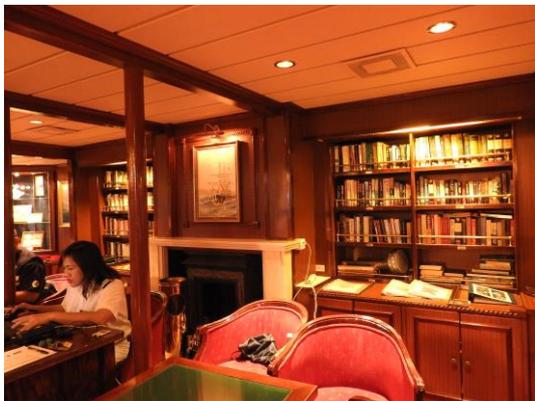
アーケト島パトン・ビーチ沖に投錨する M/S Costa Fortuna と SPV Star Clipper

混んでいるかと言えば、そうは感じないのがこの船だ。真夏のヨットのむし暑いキャビンやバースを思えば、エアコンが効いたキャビンは天国だ。大型クルーズ船では、乗船率が上がるとスペースが狭くなり、混雑を感じる。ところがスタークリッパーの場合は、小さい、狭いということが強みになる。アニータさんは”familiar (なれ親しんだ)”とか”intimacy (親密さ)”という表現をつかった。クルーズ中には行動パターンの似たもの同

¹ 一つのクルーズと次のクルーズに連続で乗船する事

士があちこちで出会う。その都度、「やあ」とあいさつし、「今日はどこへ行くのですか？」とか「今日はどうでしたか？」という会話になる。会話の回数が増え、ジョークを言い、次第に親しくなる。このことは、大型クルーズ船でも起こりそうじゃないか、と思われるが、必ずしもそうでもない。2,000人以上も乗船する大型クルーズ船内では同じ乗客と2度、3度と偶然出会う事はまれだろう。スタークリッパーの場合は、セイラー同士、海好き同士、船好き同士の集まりなのだ。乗客には“セイラーが多い”そうだし、実際に、日本人テーブルも例外ではなかった。結論として、全く個人的印象だが、この船はクルーズ船というより“大型ヨット”なのである。どこで見たのか思い出せないが、スタークリッパークルーズは“高級プライベートヨットにオーナーから招待されたイメージ”のような文言があった。まさに雰囲気はこの通りだと思う。もちろん代金は自分で払って乗船しているのだが。

船内 Wi-Fi



Wi-Fi が良く通じたライブラリー内

船内 Wi-Fi は衛星なので本船がどこに居てもつながるが、スピードは遅い。キャビン内はつながりが悪く、ライブラリー内はつながりやすい。スピードが遅いのでテキストのみが良いと思う。大きなファイルや写真を送るには向いていないのだ。60分だけ船内インターネットを購入したが、結局10分ほど余った。筆者は、クラダン島やランカウイ島などで、無線 Wi-Fi ルーターがつなが

るところでは大きなファイルを送受信したりスカイプ電話をかけたりした。

ビーチ・バー

特に規制が無いビーチに上陸すると、スタークリッパーの“ビーチ・バーがオープン”する。そう聞くと、カラフルなパラソルの下にカウンターがある、というイメージだろうか。そして、トム・クルーズの様なイケメンバーテンダーがカクテ



上陸地に“スタークリッパー”、その後方に“ビーチバー”

ルを作っていそうな……。船内新聞には“Beach Bar Open”と記載されていて、スリン島でヨレヨレになってビーチに“生還”した時に一緒に歩いてきた英国人たちが、「ビーチ・バーって書いてあったよな」と言い出した。「13:00~16:00 オープンだよ!」と筆者も船内新聞の情報を思い出して答えた。そこで、ぐるりとビーチを見渡すと、スタークリッパーの幟(のぼり)の後方に、アイスボックスが一箱、そこにウクライナ人のバーテンダーが立っていた。そのアイスボックスとバーテンダーが“ビーチ・バー”なのだった。

15 か国の国籍のクルーと 14 か国からの乗客

2 日目午前、キャプテンが「クルーの国籍は 15 か国、77 人」の説明があった。一方、アニータさん情報で、乗客は 129 人、14 か国の国籍だった。英国人 43 名、ドイツ人 42 人が多いが、日本人は 6 名だった。タイはドイツなど欧州人に人気が高い。一方、米国人は 3 名のみ。ホテルや上陸した島でたくさん見かけたロシア人の乗船はあまり無いそうである。アニータさんや日本人テーブルでは、「ロシア人は買い物好きだが、少額で 1 回だけ！」と聞いた。キャプテン、機関長、ビーチバーも担当するバーテンダーの一人もウクライナ人で、ウクライナには海員学校がたくさんあるそうである。

一人乗船はどうなのか

帆船やセイリング好きな人達に恵まれ、夕食や朝食の日本人テーブルは笑いが絶えなかった。筆者も涙を流すほど笑ったのは久しぶりだ。1 人で来たので、妻には毎日「航海の実況中継」みたいなダラダラ書きメモを送った。最終日までに 5 万字ほどのメモになった。日本人テーブルで聞いた「オフレコ話」がたくさんあったので、それも面白く、日本人テーブルの方のお許しを得て、全員に「乗船記」にして送らせていただいた。もちろん妻には一冊目を謹呈した。



「スタークリッパー乗船記」完全版

燃料問題

クルーズ 6 日目、機関長（ウクライナ人）の「エンジンルームツアー」の話。通常の燃料（軽油）

使用量は、帆走や機帆走時なら 2~3 トン/日程度、機走ばかりだと 5~6 トン/日使用するそうだ。エコミカルな航行には帆走が有効だ。燃料中の硫黄分の削減規制が欧州や北米だけでなく全世界で 2020 年 1 月 1 日から規制される。対応には 3 つの方法があり、1) 低硫黄重油への切り替え（現行 C 重油に対し 2 倍近くなる）、2) 排気ガスから硫黄分を削減する脱硫装置の取り付け（機器が大きく重量も重い問題）、3) 根本対策となる LNG 焚きエンジンの搭載（新造船対策）。

キャビン



ベッド上面が海拔 0 メートルあたり

スタークリッパーには、一部屋しかないオーナーズ・キャビンとカテゴリー 1 からカテゴリー 6 まで 7 種類。年末ぎりぎりに何とか申込んだ筆者の部屋は、ほとんど選択の余地がなく、カテゴリー



コトリより“早起きどり”の筆者の場所はビアバー奥の壁側席 コンセント口もある

3 で金額は 7 つの真ん中、位置は最も低いフロアのコモドア・デッキ左舷側 109 号室。エンジンからは遠く静かである。ドアの外の階段を 20

段ほど上がればメインダイニングという便利な部屋だ。広さは11平方メートルで狭いのだが(オーナーズ・キャビンでも22平方メートル!)、シャワーやトイレもあり、木をふんだんに使った内装など品が良く“ヨットに比べれば贅沢そのもの!”というのが筆者の印象。部屋は小さいがクロゼットは大きい。部屋の丸窓が海水面から数十cm位の高さにあり、海水面がほとんど真横に見える。部屋のベッドの床辺りは間違いなく水面下だ。そう思うと、時々鉄製の丸窓カバーを閉じ、2か所あるボルトをしっかりと締めた。パソコンはピアノバーで開いた。

食事



ランチbuffetやスナックタイムで賑わうトピカルバー前 シェフが“バナナクランベ”調理中

メインダイニングは基本的に6人~8人掛けテーブルで、2人用はない。上品なダイニングルームだ。寛いでいる乗客でテーブルが満たされるメインダイニングの雰囲気はとても良い。朝食はbuffet、昼食はトピカルバー前デッキでbuffetだったり、メインダイニングの食事も。ディナーはフルサービスと言え少し大げさだが、メニューを見て3~4品注文する。デザートもある。ディナーはメニューと実サンプルがピアノバーに準備されるので、見て確認できる。丁寧な料理で味付けも良い。日本人テーブルには、草野さんのアレンジで朝食時にはお粥があった。梅干しや鰹節など具を数種類持ち込んでおられたので、筆者は概ね早朝のペストリーを食べていたが、お粥だ

けは毎日食べに行った。夕食前にトピカルバーのデッキでのスナックタイムもあり、アルコールが好きな方は楽しめる。筆者のように“まんじゅ



トピカルバーのカウンターは乗客の憩いの場

う怖いよ”という甘党には、ランチbuffetの1日、温かい“バナナ・クランベ”に冷たいアイスクリームを添えて試してみることをおススメしたい(写真)。絶品だが、毎回メニューにあるのか、筆者には不明である。



“バナナ・クランベ”にアイスクリームを添えて”

このクルーズ中、笑いの絶えないものにしてくれた日本人テーブルの方々や、素晴らしいコーディネーターやサポートをしてくれた草野さんに感謝したい。スタークリッパー・ジャパンの荻原氏からは、乗船初日の日本人テーブルのディナーに赤白ワインの差し入れがあった。最後に、本乗船記は筆者の個人的体験や印象に基づく事を付け加えると共に、拙い乗船記に紙面を割いて下さった航海クラブ渡辺会長と服部事務局長に感謝したい。

おわり